

## 書 評・紹 介

AIDELF, *Les migrations internationales.*

*Problèmes de mesure, évolutions récentes et efficacité des politiques,*

Paris, AIDELF, 1988, 513pp.

本書は AIDELF (フランス語使用人口学者国際協会) による叢書の第 3 巻目に当たり、1986年 9 月にイタリアのカラブリア県 (伝統的移民送地) で行われた国際人口移動に関するセミナーの議事録である。会長の E. Lapierre-Adamcyk の序文によれば、観察が困難で制御が不可能な国際人口移動のより良い理解に貢献することがこのセミナーの目的であった。これは国際人口移動の指標、近年の動向、政策の有効性、イタリアの事例研究に関する四つの部会から成っていた。

本書の第一部は「国際人口移動の測度」と題され、第一部会組織者の M. Poulain の総論と総括報告者の J. Gaymu の総括報告に続き、10編の各論的論文が掲載されている。第二部は「最近の動向とその説明要因」と題され、第二部会組織者の P. J. Thumerelle の総論と総括報告者の C. Wattelar の総括報告に続き、13編の各論的論文が掲載されている。第三部は「政策の有効性」と題され、第三部会組織者の H.-M. Hagmann の総論的総括報告と総括報告者の S. Feld の総論に続き、10編の各論的論文が掲載されている。第四部は「移出から移入へ——イタリアの事例——」と題され、組織者の M. Natale の総論に続き、14編の各論的論文が掲載されている。従って、本書の副題には第一部から第三部の内容のみが含まれていることになる。

国際人口移動を扱った書物は諸外国で多数出版されているが、それらの多くは本書の第二部のように各国別の動向とそれらの要因を論じたり、第四部のように一国に関する事例をまとめたものである。本書の第一部のように測定方法に焦点を合わせたものは少ない。また、各国別の国際人口移動政策を扱った書物は若干あるが、その有効性に焦点を合わせたものは皆無のようである。このように独創的な第一部と第三部を含み、それらがそれぞれ書物の一冊分に相当する分量をもつという点で本書の価値は非常に高い。また、各論的論文の中には先進諸国のうちではあまり注目されてこなかったイタリアやベルギーに関するものや旧フランス植民地の途上諸国に関するものが含まれているという点も大きな特色である。特に前者の一部と後者は移民送出国の状況を明らかにするという点で意義がある。

本書の中でもっとも独創的な第三部には前述の二つの総論的論文のほか、フランスにおける国際人口移動政策の効果を検討する上で重要な論文がいくつか含まれている。INED (国立人口研究所) の J. Véron がフランスにおける家族呼び寄せ政策について論じ、いずれも CNRS (国立科学研究センター) に所属する国際人口移動の専門家である G. Abou-Sada, C. Wihtol de Wenden, J. Costa-Lascoux が最近のフランスの国際人口移動政策の変化ないし国籍政策を異なった観点から評価している。また、アメリカのブランダイス大学の J. F. Hollifield が戦後フランスの時系列データを使って政策効果の重回帰分析を行っている。

しかし、Feld の分類におけるフローに関する政策のうちの非合法入移民政策とストックに関する政策 (統合政策と帰国促進政策) に関する評価が十分になされていないという点が残念である。また、複数の著者が INED の J.-C. Chesnais による出生促進政策の有効性に関する議論 (本誌第45巻第2号の拙稿を参照されたい) を引用し、国際人口移動政策の有効性の概念や測定方法に適用しようと試みているが、十分な展開がなされていない。この問題に関する先行研究がほとんどない現状ではやむを得ない面もあるが、出生抑制政策や出生促進政策の有効性についてはかなり研究の蓄積があるので、それらをもう少し利用すべきではなかったかと思われる。また、Feld は有効性に関する議論で出生政策と国際人口政策の類似性について若干論じているが、人口政策としての両者の代替性や補完性についても論じる必要もあろう。

(小島 宏)